

[A] 4世紀のヤマト政権(ヤマト政権の成立)ーテキスト P6 対応ー

弥生時代の頃は、『漢書地理志』や『後漢書東夷伝』・『魏志倭人伝』など中国の歴史書に倭(日本)のことが書かれてあったので、その当時の倭(日本)の様子を知ることができたよね。

ところが、その後中国では五胡十六国時代という戦乱の時代に突入してしまい、歴史書に日本の様子などを記している余裕はなくなってしまった。そのため、その後の倭に関する記述は*いっさい*無く、4世紀の倭の様子を中国の歴史書から知ることはできないんだ。

そして、その後、再び倭が登場してくるのは、5世紀の内容が記された『宋書倭国伝』まで待たなければならない。ところが、その5世紀には、すでにヤマト(大和)政権と呼ばれる連合政権が成立していて、その倭の五人の王が中国の皇帝に朝貢してきたと記されている。

つまり、倭の4世紀は、中国の歴史書に記されていない「空白の時代」であり、おそらくその4世紀にヤマト政権が成立し、5世紀にはヤマト政権の王様が中国の皇帝に使者を派遣していたわけだ。

＜中国の歴史書における倭(日本)に関する記述＞

- B. C. 1世紀……倭(日本)は100余国に分立し、定期的に楽浪郡に遣使 in 『漢書地理志』
- A. D. 1世紀……奴国の王が光武帝に遣使 in 『後漢書東夷伝』
- A. D. 2世紀……倭国大乱(2世紀後半) in 『後漢書東夷伝』
- A. D. 3世紀……邪馬台国に関する記述 in 『魏志倭人伝』
- A. D. 4世紀……倭(日本)に関する記述は*いっさい*無し＝空白の時代
- A. D. 5世紀……倭(日本)の五王が中国南朝の宋に遣使 in 『宋書倭国伝』

…これは困るよね～。肝心のヤマト政権が成立した内容が歴史書に記されていないわけだから、そのヤマト政権自体がどのように成立し、どのように展開されていったのかを知ることができないんだ。こういった文献を調べていくことによって、歴史を解明していく学問を文献学というんだけど、このヤマト政権に関する史料がほとんどないため、文献学でヤマト政権を解明していくには限界が生じてしまうわけだ。

そのため、重要になってくるのが、遺跡や古墳・遺物などを調べることによって歴史を解明していく考古学だ。こうした遺跡や古墳を調査していくことによって、4世紀の倭がどのように展開し、どのようにしてヤマト政権が成立していったのか、ということも類推していくことが可能になるんだ。

さて、それでは古墳時代の話をしていこう。でも、いきなり古墳時代になるとはとっても、弥生時代の続きとして古墳時代があるのだから、古墳時代初期の頃は弥生時代の延長線上の話なんだ。

では、弥生時代とはどういう時代だったか簡単におさらいしてみよう。弥生時代には大陸から水稲耕作の技術が伝わり、日本でも稲作が行われるようになった。そして、こうした稲作の開始によって余剰生産品を蓄えることが可能になったため、財を蓄える者と蓄えざるものが現れる。その結果、貧富の差(身分階級)が発生して、その地域ごとのムラを支配する首長が誕生していったわけだ。

その後、その首長たちが自分の支配地域を守るため、もしくは勢力を拡大していくため、各地で争いが起こるようになったわけだけど、じゃあ質問。彼ら首長が地域を統合して豪族へと成長していくわけだけど、彼ら豪族にとって重要なものは何だったと思う？

それは鉄資源だ。だって、農業をするにも農具には鉄が必要だし、戦争をするにも武器となる鉄が必要でしょ？だから、豪族にとって武器や農具となる鉄資源の確保は必要不可欠なわけだ。ところが、当時の倭では、鉄資源を武器や農具に加工する技術は持っていたものの、自ら鉄自体を作り出す技術がなかったんだ。つまり、鉄そのものを日本独自で作り出す技術はなかったわけだね(鉄が日本でも作り出されるようになったのは6世紀と考えられている)。

じゃあ、その鉄資源自体はいったいどこでとれるのか？それは、先進国で資源が豊富な中国だ。だから、倭の豪族たちは、その中国でとれた鉄を、朝鮮半島を経て「おすそわけ」してもらっていたんだ。つまり、中国でとれた鉄は朝鮮半島の百済や新羅に送られ、それが伽耶諸国(加羅)を経て、九州北部、瀬戸内・畿内って順番で鉄がやってきていたわけだ。ゆえに、日本が鉄をゲットするためには、中国との関係はもちろんのこと、特に朝鮮半島との関係が非常に重要になってくるよね。そのため、当時の倭は鉄資源を獲得するため、伽耶諸国(加羅)と密接なつながりを持っていたんだ(のちには伽耶諸国から鉄資源がとれるようにもなったため、そのためにも伽耶諸国と密接なつながりをもつ必要性があった)。まあ、まとめると倭(日本)は、中国→百済・新羅→伽耶諸国(加羅)→九州北部→瀬戸内・畿内というルートを経て鉄を入手していたわけだ。

ところが、ここで一つ問題が出てくる。こういった鉄を入手するルートの過程で、一番鉄をゲットしにくい地域がある。それが畿内や瀬戸内地方だ。そりゃ、そうだよ。だって、君たちが九州北部の豪族だったらどうする？わざわざ畿内や瀬戸内の豪族に鉄を分けてあげる？あげるわけないよね。だって、将来的には自分と戦う羽目になるかもしれないわけだからね。

だから、畿内や瀬戸内の豪族からしてみれば、どうにかして九州から鉄入手ルートを奪ってやりたい。でも、さすがに一人の豪族が九州と戦っても勝てるわけないでしょ？そのためには、畿内・瀬戸内の豪族が協力しないと不可能だ。そこで、畿内と瀬戸内の豪族が結びついた豪族の連合政権をつかって、九州から鉄の入手ルートを奪っちゃおうと考えたんだ。

こうして成立した畿内・瀬戸内を中心に出来上がっていった豪族の連合政権をヤマト政権という。そして、その畿内の豪族の中で、最も勢力を持っていた豪族が後の天皇家にあたる大王だったんだ。なお、この時期はまだ天皇ではなく、大王と呼ばなければならない。正式に天皇という呼び名が成立したのは、天武天皇の治世にあたる7世紀後半にあたるので、それまでは大王というんだ(天武天皇よりも前の天皇の名前は、すべて諡号しごうといって後の世になって贈られた名前であるので、それまでの時期は天皇とは呼ばない。ゆえに、推古天皇や天智天皇などもすべて後の世に贈られた名前である)。

こうして鉄の入手ルートを確保するために成立した畿内・瀬戸内のヤマト政権は、九州に攻撃をかけ、九州の豪族たちを従属化させ、彼らから鉄の入手ルートを奪っちゃったわけだ。さて、こうしたヤマト政権にとっては、このあと裏切りなどが出ないように連合政権の結束を強めていかなければならない。そこで、彼らは自分たちが結びついた証として、共通のあるものを築造していくようになった。それこそが古墳なんだ。それゆえに、この時期から前方後円墳などの古墳が造営されていき、ヤマト政権の発展に伴い各地にも造られるようになったんだ。

ちなみに、もう一つ面白い話をしよう。この豪族の結束の証として築造された古墳だけど、その古墳の大きさは各地方の豪族の序列を示していると考えられている。どういうことかということ、こういった古墳の中で、最も大きいものは畿内に集中している。そして、その次に大きいものは瀬戸内地方。そして、九州地方が一番小さいんだ。つまり、古墳の大きさ自体が、そのヤマト政権における畿内・瀬戸内・九州という地方の序列を示していると考えられるわけだね。

さて、豪族たちが結びついたヤマト政権は、朝鮮半島と関係を持つことによって鉄資源を確保していたわけだけど、これが4世紀末から状況が一変してくる。それが、4世紀の末頃から勢力を拡大し始めた高句麗の南下政策だったんだ。これは、朝鮮半島北部にある高句麗が4世紀末頃から勢力を広げるために、南の百済・新羅へ勢力を広げ始めたことだ。そして、徐々に百済や新羅を圧迫するようになっていったんだ。こいつは百済にとってもやばいよね。百済としてみれば、高句麗と戦わなければいけないわけだけど、そのためには自分の背後である南を固めておく必要がある。そのため、この時期から日本と友好関係を持ち仲良くするようになるんだ。

そこで、この百済の王様が日本の倭王にプレゼントを贈ったんだ。それが**369年(泰和4年)**に、**百済の肖古王**が倭の王に贈った**七支刀**ってやつだ。この七支刀とは、右の写真のように、身の左右に3本ずつの枝が出ていて、その身の表と裏に金石文で61文字の銘文が記されている鉄剣。ちなみに、今現在この七支刀は、**物部氏の氏神にあたる奈良県の石上神宮**というところ



〈七支刀の覚え方〉

「寒くてくだらん七支刀」

→寒く(369年)てくだら(百済)

に所蔵されている(物部氏は物部守屋の時に滅ぼされて、その後石上氏って名前に変えたため、物部氏の氏神は石上神宮という)。ゆえに、この**石上神宮七支刀**は倭(日本)と百済の友好関係を示すものとして覚えておこう。〔七支刀〕

国 百済との友好「石上神宮七支刀」(奈良県)

〔表〕泰和四年□月十六日、丙午正陽、百鍊鉄七支刀を造る。……

〔裏〕先世以来、未だ此の刀有らず。百済□世□、奇生聖音、故に倭王旨の爲に造り、□世に伝□せんとす。

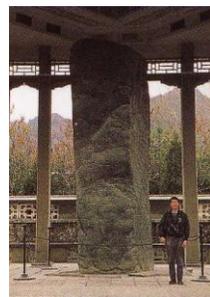
(〔表〕369年□月16日、丙午の正午、よく鍛えられた鉄で七支刀を作る。)

(〔裏〕このような刀は前代未聞である。百済の王(肖古王と考えられる)と皇子、奇生聖音(仇首王のことか)は、それ故に倭王旨(倭王讚のことか)のためにこの刀を作り、後世に伝えようとした)

しかし、高句麗の南下政策の勢いを食い止めることはできずに、結局百済も新羅も高句麗に服属させられちゃったんだ。こいつはやばいよ？だって、百済や新羅が従属させられて、今度は伽耶諸国まで従属させられちゃったら、日本が鉄をゲットすることが困難になってしまうよね。つまり、今までの中国→百済・新羅→伽耶諸国(加羅)→倭(日本)という鉄入手ルートの危機を迎えることになってしまったわけだ。

そのためには、朝鮮半島における高句麗の南下政策を抑えなければいけない。そこで、**辛卯の年**にあたる**391年**に朝鮮への出兵が行われたんだ。この朝鮮に出兵した目的は今まで説明してきたように、**鉄資源を確保するため**、そして、そのついでに**朝鮮半島の先進技術を獲得するため**だ。

朝鮮半島に出兵したヤマト政権は、百済・新羅を破って、いったんは倭に服属させることに成功した。しかし、この高句麗の王様である**好太王(広開土王)**が出陣して、結局負けてしまったんだ。なぜ倭(日本)が負けたことがわかっているのかというと、この戦いの後に、好太王の子供である**長寿王**が「俺の親父は朝鮮半島に攻め込んできた倭(日本)と戦って、その戦いに勝ったんだぞ～」ということを記念して、石碑を建てたからなんだ。これが有名な「**高句麗好太王碑文**」だ。なお、一応この碑文がどこに立っているのかをテキストの地図で確認しておこう。これは**鴨緑江**という川が流れている高句麗の都である**丸都**(現在の**中国吉林省集安市**)に今現在も建っている。



〔高句麗好太王碑〕

国 朝鮮半島への進出『高句麗好太王碑文』

百済・新羅は旧是れ属民なり。由来朝貢す。而るに倭、**辛卯の年**よりこのかた、海を渡りて**百済・□□(新羅)**を破り、以て臣民と為す。六年丙申を以て**王躬**ら水軍を率ゐ、**残国**を討科す。……**百済**王困逼して男女生口一千人・細布千匹を献出し、王に帰して自ら誓ふ。今より以後、永く奴客と為らんと。……九年己亥、**百済**、誓に違ひ、**倭**と和通す。王平穰を巡下す。

(**百済(百済)・新羅**は古くから高句麗に服属し、以前から朝貢していた。ところが、倭が**辛卯の年(391年)**から海を越えて襲来し、**百済(百済)**や**新羅**を破って服属させてしまった。396年**王(好太王)**自らが水軍を率いて**残国(百済)**を討伐した。……**百済(百済)**王は困って奴隷1000人と美しく細い布1000匹を献上し、好太王に帰順して自ら誓った。「これからは好太王の奴隷となります」と。……399年、**百済(百済)**はその誓いを破って**倭**に通じていたので、再び好太王は兵を出した。)

さて、このように朝鮮半島では戦争が10年近く続いていたわけだから、朝鮮半島は相当治安が悪くなってしまふ。だから朝鮮半島に住んでいる人々にとって、朝鮮半島は戦争に巻き込まれる可能性もある危ないところ。それなら、戦場となっていない日本の方が安全だよ。そのため、この4世紀から5世紀にかけて、朝鮮民族や漢民族の人々が日本に渡ってきたんだ。こうした日本にやってきた朝鮮民族や漢民族を渡来人という。

この渡来人たちの中で、応神天皇の時に来日してきたといわれる伝説上の人物が、秦氏の祖といわれる弓月君(養蚕や機織を伝える)、東漢氏の祖といわれる阿知使主、西文氏の祖といわれる王仁(『論語』・『千字文』を伝える)の3人だ。彼ら弓月君・阿知使主・王仁が日本に渡来してきた後、彼らの子孫が日本に住み着くようになり、それぞれ秦氏・東漢氏・西文氏と名乗るようになったので、それぞれ「〇〇氏の祖」と呼ばれるわけだ(特に東漢氏と西文氏は文章を書く文筆に優れていたので、史部とよばれる外交文書を作成する集団を管理していた)。特に、王仁に関しては、もともと日本にやってきていた阿直岐という人物の薦めで来日し(阿直岐は阿知使主と酷似しているので同一人物ではないと言われている)、儒教の經典である『論語』と、識字・習字のためのテキストである『千字文』(漢字練習帳みたいなもの)を伝えた、という細かい点も聞かれたりするので注意しておこう。

＜渡来人の覚え方＞

「あっちの山でワニ皮ゆずったハンター」
→ あっち(阿知使主)の山(東漢氏)で
ワニ(王仁)皮(西文氏)
ゆず(弓月君)ったハンター(秦氏)

[B] 5世紀のヤマト政権(ヤマト政権の支配拡大)ーテキスト P6 対応(図解は P7 対応)ー

さて、それでは話をヤマト政権の説明に戻そう。畿内に出来上がった豪族の連合政権は、391年から朝鮮出兵を行ったものの結局高句麗の好太王に敗れてしまった。こうなると高句麗が図に乗って、ますます勢力を伸ばしてくる可能性が高いよね。だから、倭(日本)としては戦争に負けた後でも、どうにかして高句麗の勢力拡大を食い止めなくちゃいけないんだ。

じゃあ、どうしよう？再び朝鮮半島へ出兵する？…いや、もうそんな力は残ってない。武力によって高句麗を食い止めることは困難なわけだ。そうすると、あとは外国との交渉、つまり外交がカギになってくる。そう、東アジアの国と外交を行うことによって、高句麗の勢力拡大を牽制しようと考えたわけだ。そこで、この5世紀にかけて倭(日本)の五王が中国南朝の宋へ使いを派遣するようになったんだ。そして、その内容が宋の歴史書である『宋書』倭国伝に記されていたんだ。

＜中国と冊封体制＞

当時の中国は、南朝の宋と北朝の北魏に分裂した南北朝時代であった。そして、この二つの国はどちらも中国の国であるため、冊封体制と呼ばれる中国を中心とした国際秩序を形成していたんだ。冊封体制とは、中国と周辺地域の国の形式上の君臣関係で形成された国際秩序のことをいうんだけど、少し抽象的すぎてわかりづらいので、簡単に冊封体制とは何なのか説明しよう。

まず、そもそも中国人は他民族国家で、50近くの民族から成り立っている。中国の民族には、漢民族・女真族(満州族)・モンゴル族・チベット族・ウイグル族などの民族があるんだけど、その中でも9割以上の大多数を占めるのが漢民族なんだ。そして、その漢民族は中華思想(華夷思想)といって、「世界で一番優れている民族は漢民族である」という特殊な考え方を持っている。ここから、彼ら漢民族は、自分たちのことを世界の中心である「中華」と考えているんだ(中国という国名も、世界の中心の国であるという意味…何かムカつくけど)。そのため、漢民族以外の周辺異民族を、文化の遅れている野蛮な「夷狄(蕃夷)」とみなして、それぞれ東西南北に住む異民族を東夷・南蛮・西戎・北狄と呼んでいたんだ(『後漢書』東夷伝における「東夷」も、東に住む異民族の「倭」のこと指している)。

そこから、中国こそが一番の「中華」であり、それ以外の周辺諸国は中国よりも下の国である野蛮な国の「蕃夷(夷)」とみなし、「中国はそういった国の上に立つ国であり、それ以外の周辺諸国は中国に服属するために貢物をもってこい」と考えるんだ。そして、周辺諸国の中で宗主国である中国に朝貢をしてきて、それを中国が認めた場合、中国の皇帝がその国の王様に位階や称号を与えて、その地域の支配を認めてあげるんだ。こうしたその国の王が支配地域を保障されることを「冊封を受ける」という(反対に中国側からすると「冊封を授ける」ということになる)。これによって、「中国は周辺諸国の上に立つ宗主国であり、それ以外の周辺諸国は中国に服属する属国」という形式的な主従関係が成立するんだ。

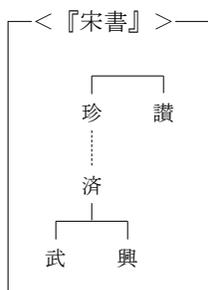
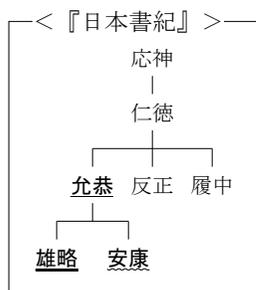
こうした冊封を受けると、その国は形式上中国に従属することになるんだけど、その代わりにメリットがある。まず、中国皇帝の権威を借りて国内の政権を安定させることができること。つまり、国内の家臣たちや、外国に対して「俺は中国皇帝からこの国の支配を任せられた王様なんだぞ」と示すことができるわけだ。それから、もう一つが中国の経済や文化などの交流を認められることによって、先進国である中国の品物や文化をゲットできるということだ。

そして、その当時の中国では南北朝時代であり、南朝の宋と北朝の北魏に分かれていた。そのため、この当時の朝鮮半島の諸国では、国内の支配や対外関係のために、百済は南朝の宋に朝貢し、新羅を従属させた高句麗は北朝の北魏に朝貢していたんだ。

このように、当時日本と対立関係にあった高句麗は北朝の北魏に朝貢していた。そこで、讚・珍・済・興・武という倭の五王たちは、5世紀にかけて高句麗を牽制するため、そして、百済・新羅・任那(加羅・伽耶諸国)など朝鮮半島における外交・軍事上の立場を有利にするために、南朝の宋に使いを派遣したわけだ。

ところで、讚・珍・済・興・武って誰やねん？実は、彼らには、日本では安康天皇とか雄略天皇といったちゃんとした名前があるんだけど、中国では、そんな日本での名前を言っても通じない。そこで、中国に合わせて「自分は“讚”と申します」とか「自分は“珍”と申します」とか中国の名前を名乗っておいたわけだ。

ということは、それぞれ讚・珍・済・興・武が日本でいう誰天皇にあたるのか、というのが重要になってくる。ところが、讚・珍・済・興・武が登場する中国の『宋書』の系図と、天皇の名前が記されている『日本書紀』に書かれてある系図が少し異なっているんだ。



< 朝鮮出兵の覚え方 >

「作(39)為(1)があったか好太王碑」
 ※好太王碑には明治時代の日本軍部による改竄説があったが否定的見解が強い

< 倭王武の上表文の覚え方 >

「至(4)難(7)は(8)これから雄略天皇」

上の系図を見てみると、讚は応神天皇 or 仁徳天皇 or 履中天皇の可能性があり、同じく珍も仁徳天皇 or 反正天皇の可能性があり。だから、これらは入試では問われない。

それに対して、済の場合は允恭天皇、興の場合は安康天皇、武の場合は雄略天皇にあたる可能性が高いよね(済(允恭天皇)が父親にあたり、興が兄(安康天皇)、武(雄略天皇)が弟にあたる)。それゆえ、入試では允恭天皇・安康天皇・雄略天皇までが問われるんだけど、この中で、その遣使した際の中身まで問われるのが最後の武の雄略天皇。そして、彼は478年(順帝の昇明2年)に宋の順帝に使いを派遣して、南朝から「六国諸軍事安東大將軍倭国王」の称号をもらったんだ。

㊦ 倭王武の上表文『宋書』倭国伝 by 沈約

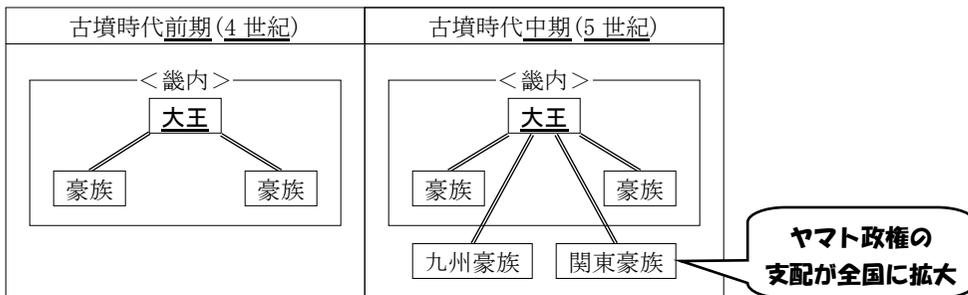
…興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王と称す。順帝の昇明二年使を遣して上表して曰く、「封国は遍遠にして藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑を撰き、山川を跋渉して寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡て海北を平ぐること九十五国」と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王に除す。

(興(安楽天皇)が死んで、弟の武(雄略天皇)が即位した。自ら倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓(辰韓のこと)・慕韓(馬韓のこと)7カ国の軍事的指揮権をもつ安東大將軍倭国王と称した。順帝の昇明2年(478年)、使いを送って上表した。「私の国(倭)は、中国からは遠い辺りな所に国を立てています。昔から私の祖先は、国土を平定するために、自ら甲冑を身につけて武装し、山川を駆けめぐり休む暇もありませんでした。そして、東は毛人(蝦夷のこと)を55カ国、西は衆夷(熊襲のこと)を66カ国、そして海を越えて海北(朝鮮半島)は95カ国を征服しました」と。そこで皇帝(順帝)は、武(雄略天皇)を倭・新羅・任那・加羅・秦韓(辰韓のこと)・慕韓(馬韓のこと)の6カ国の軍事的指揮権をもつ安東大將軍倭王に任命した。)

この南朝に使いを派遣した理由は先ほども述べたように、南朝から冊封を受けることで、百濟・新羅など朝鮮半島諸国に対する優位的な立場を公認してもらうためだ。つまり、「中国から百濟や新羅などよりも日本が上の立場の国であることを正式に認めてもらうことで、朝鮮半島に対する日本の国際的な地位を向上させようとしたわけだ。ところが、この時に気をつけなければいけないのが、日本は百濟に対する優位性も認めてもらおうとしたんだけど、百濟は日本よりも前から南朝に朝貢してその地位を認められていたので、最終的に百濟だけは除かれたということ。だから、日本は自ら「七国諸軍事安東大將軍」に任命してくれとお願いしたものの、百濟は除かれて「六国諸軍事安東大將軍」に任命されたわけだ。また、もう一つ気をつけておくべきことが、北朝に朝貢をしていた高句麗ははじめから含まれていないということ。そりゃあ、南朝の宋が敵対している高句麗に対する支配権も認めてくれ、なんて言ったら宋から怒られちゃうもんね。

さて、このように、朝鮮半島における日本の優位性を認めてもらうために、倭の五王は南朝に朝貢したわけだけど、実はこの他にも目的があったんだ。それが、中国皇帝から称号を授かることで国内の諸豪族の支配を安定させて、国内的な立場の強化するということ。でも、イマイチ具体的にはよくわからないよね。この目的を説明するためには、少しヤマト政権の国内の様子を見ていかなければならないんだ。

今までのヤマト政権は畿内や瀬戸内などを中心とした豪族の連合政権だった。ところが、時が経つに連れて、ヤマト政権の支配地域が全国的に拡大していったんだ(『宋書倭国伝』の文中に「昔より祖禰躬ら甲冑を撰き、山川を跋渉して寧処に違あらず(昔の祖先の頃から甲冑を身につけ、山川を駆け巡り、休む暇も落ち着く暇もありません)」とあるように、支配地域を広げていったと考えられる)。その結果、ヤマト政権の支配地域は九州地方から関東地方まで拡大していったんだ。



でも、何で関東から九州までってそんな具体的にわかってるんだ？って感じだよ。これは、熊本の江田船山古墳から出土した鉄刀と、埼玉の稲荷山古墳から出土した鉄剣に刻まれた銘文によって具体的にわかっているんだ。まず、江田船山古墳から出土した鉄刀には、その刀背部に銀象嵌で75文字が記されていて、埼玉稲荷山古墳から出土した鉄剣には、その鉄剣の表と裏に金象嵌で115文字が記されていた。そして、そのどちらにも「私は獲加多支鹵大王 (雄略天皇と考えられている)にお仕えて、その記念としてこの鉄刀・鉄剣を造りました」と書かれていたんだ。このことから、江田船山古墳のある九州と、稲荷山古墳のある関東はヤマト政権の支配地域が及んでいたことがわかるよね。だから、獲加多支鹵大王 (雄略天皇)の頃には、地方の諸豪族たちに対して大王がいかにかスゴイのか、その権威を見せつける必要があった。そのため、南朝の宋に遣いを送って「安東大將軍」という立派な称号をもらうことで、箔を付けようとしたわけだ。

㊦ 漢字の使用①「江田船山古墳出土鉄刀銘」(熊本)

天下治めす獲□□□鹵大王の世、奉□典曹人、名は無□利豆、八月中、大いなる鑄釜と、并せて四尺の延刀とを用ゐ、八十たび練り、六十たび拵じたる三寸上好口刀なり。……
(獲加多支鹵大王 (雄略天皇と考えられている)の統治する御世、典曹人 (事務官)として仕えていた、名前は无利豆という者が、8月中に、大きな釜と、4尺の延刀(延べ金で作った官刀)を用いて、何度も精錬を重ねた立派な刀を作った。)

㊦ 漢字の使用②「稲荷山古墳出土鉄剣銘」(埼玉)

〔表〕辛亥年七月中記す。乎獲居臣、上祖の名は意富比埴、其の兒多加利足尼、其の兒名は豆已加利獲居、其の兒名は多加披次獲居、其の兒名は多沙鬼獲居、其の兒名は半豆比、
〔裏〕其の兒名は加差披余、其の兒名は乎獲居臣、世々杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。獲加多支鹵大王の寺、斯鬼宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百鍊の利刀を作らしめ、吾が奉事せる根原を記す也。
〔〔表〕辛亥年(471年)7月中に記す。乎獲居臣、その祖先は意富比埴、その子は多加利足尼、その子の名は豆已加利獲居、その子の名は多加披次獲居、その子の名は多沙鬼獲居、その子の名は半豆比、)
〔〔裏〕その子の名は加差披余、その子の名は乎獲居臣、代々杖刀人(親衛隊)の長になり、朝廷に仕えて現在にいたる。獲加多支鹵大王 (雄略天皇と考えられる)の朝廷が斯鬼宮にあった時、私は、大王の統治を助けたので、この精錬された立派な刀を作らせて、自分が大王に仕えてきた由来を記すのである。)

前者の熊本県江田船山古墳出土の鉄刀は、无利豆という人物が雄略天皇の典曹人 (事務官)として仕えた記念につくったもので、後者の埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣は、乎獲居という人物が杖刀人 (親衛隊)として雄略天皇に斯鬼宮で仕えていた時に、その記念としてつくったものなんだけど、後者はなかなか滑稽だよ。 乎獲居という人物が自分の祖先を紹介するために、先祖の名前を書きまくっているけど、結局書ききれなくなって裏にまで書き続けていくんだから(別に埼玉県民をバカにしているわけじゃないよ!)。

このように、九州や関東にまでヤマト政権の支配が拡大していったわけだけど、豪族たちがいつ何時ヤマト政権に逆らうかもわからないし、そういった豪族たちにヤマト政権の大王の権威を示しておかなければならない。そこで、こういった国内の豪族の支配を安定させるために、中国の皇帝から「安東大將軍」という称号をもらって、こいつらに大王の権威を見せつけようとする。こうして、中国皇帝から爵位・称号をもらうことで、国内の軍事的支配と政治の安定をはかったわけだ。

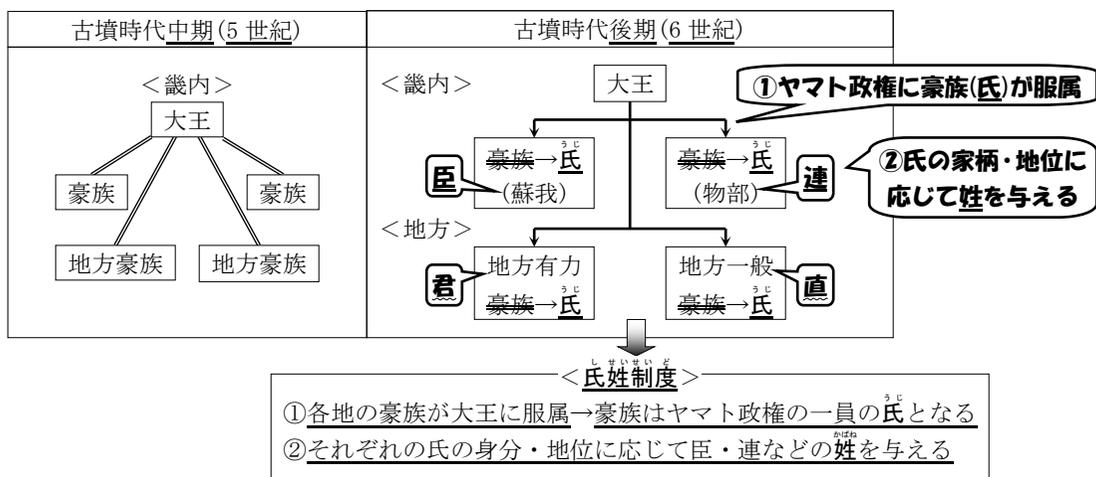
[C] 氏姓制度の成立—テキストP7(図解NOTE)対応—

5世紀までのヤマト政権は、中国皇帝の権威を利用することで、国内の豪族支配を安定させようとしていた。でも、これは裏を返せば、国内の支配体制がしっかり確立されていないということになる。国内の支配体制が、一番勢力を持っている大王家と、それ以外の蘇我氏・大伴氏・物部氏などの豪族とが結びついた「豪族の連合政権」にすぎないから、中国皇帝の権威によって支配体制を強化していたわけだ。

ただし、支配地域が拡大すればするほど、いつまでも中国皇帝の権威に頼っている場合じゃなくなってくる。つまり、今までのヤマト政権のような「豪族の連合政権」では、その支配体制に限界が生じてきてしまうんだ。そのため、今までのような「豪族の連合政権」から、「大王が他の豪族を支配する」体制に変えていく必要性が出てくる。つまり、大王をトップとして、それ以外の豪族が大王に服属する形に変えていこうとしたわけだ。そこで、こうした支配地域の拡大に伴って、5世紀末頃から**氏姓制度**と呼ばれる新しい支配体制が5世紀末頃から作られていったんだ。

まず、この新しい制度では、豪族たちは大王に服属して、大王の支配を受けることになる。そのため、これからは豪族ではなく、ヤマト政権の構成員となり「**氏**」と呼ばれるようになるんだ。だから、畿内の有力豪族たちも「氏」になるし、地方にいる豪族たちも「氏」となるわけだ。詰まるところ、「氏」とはもと豪族のこと、と考えるとよいね。

でも、畿内の有力豪族からしてみれば、「ちょっと待てや。勢力のある俺ら畿内の豪族も氏で、あんま大したこともない地方の豪族も同じ氏ってムカツクんだけど。」って話だ。そりゃあ、畿内の豪族からしてみれば、地方の豪族と同じ「氏」にひとくりにされては、たまったもんじゃないよね。そこで、それぞれ豪族の身分・地位・勢力などに応じて、「**姓**」と呼ばれる称号を与えて豪族の身分の差別化をはかろうと考えたんだ。例えば、蘇我氏などの大和地方の有力豪族には「**臣**」という高い地位を示す姓をあげましょう。また、物部氏・大伴氏など職能で仕える有力豪族には「**連**」という高い地位を示す姓をあげましょう。一方で、地方の有力豪族には「**君**」という少しだけ身分の高い姓を与えましょう。地方の一般豪族には「**直**」という低い身分を示す姓を与えましょう、と区別したんだ。こういった大王の支配下に組み込まれた「**氏**」に対して、それぞれの身分・地位を示す「**姓**」を与える制度が「**氏姓制度**」なんだ(ここまでは図解NOTEに対応する箇所を説明したもので、詳細については次項参照)。



[D] 氏姓制度—テキスト P7 対応—

では、具体的に氏姓制度の中身を説明していこう。そもそも、氏姓制度とは、今までの「大王と豪族たちによる連合政権」から、「大王が豪族たちを支配していく体制」に変えるためにとられた制度だったよね。つまり、豪族たちを大王の支配下に組み込んでいくための組織なわけだ。

今までの豪族が大王に服属してその支配下に入る、つまりヤマト政権の構成員の一員となると、これ以降は「豪族」から「氏」もしくは「氏族」と呼ばれるようになる。だから、「氏」はもと豪族であると考えればいだけだね。こうしたヤマト政権の構成員となった血縁的結びつきをもとにした集団を「氏」というわけだけど、ちょっとこの「血縁的結びつきをもとにした集団」という意味がわかりにくいよね。これはどういうことかと言うと、そもそも豪族って一人で豪族をやっているわけじゃない。豪族の中には氏上と呼ばれるトップがいて、その下には氏人と呼ばれる家来のような奴等がいるんだ。そして、そのトップ層と家来層が血縁的な関係でつながっているってだけという話だ。

そして、この豪族層は、部氏と呼ばれる一般 people や奴(奴婢)という隷属民を支配しているんだけど、彼ら民衆が暮らしている集落とは離れたところに造営された居館という居住地に住んでいる。そりゃあ、古墳に埋葬されるぐらいに権力の強いんだから、豪族たちは自分の屋敷を構えているはずだね。このような豪族の居館跡として、日本で初めて発見されたものが群馬県の三ツ寺 I 遺跡だ。

ところが、豪族と言っても千差万別。非常に勢力の強い豪族もいれば、あまり勢力のない豪族もいるし、はたまた特殊な技能を持った豪族などもある。そこで、こうした豪族の勢力や地位、もしくは担当している職務に応じて、ヤマト政権から「姓」と呼ばれる称号を与えてあげるんだ。つまり、それぞれの豪族のプライドを保ってあげるために、豪族にそれぞれの地位を示す称号を与えてあげたわけだ。

こうしたそれぞれの豪族の担当している職務や、家柄など社会的地位に応じて、ヤマト政権から与えられた称号を「姓」というわけだけど、当然地位を示すものなわけだからいくつかの称号がある。それが以下のものだ。

＜ヤマト政権から与えられる「姓」＞

<u>臣</u>	…本拠地の地名を冠した大和地方の有力豪族に与えられる	ex. <u>蘇我氏</u> ・ <u>平群氏</u> ・ <u>葛城氏</u>
<u>連</u>	…特定の職務で仕えた有力豪族に与えられる	ex. <u>大伴氏</u> ・ <u>物部氏</u> (軍事)・ <u>中臣氏</u> (祭祀)
<u>造</u>	…特定の職務で仕えた一般豪族に与えられる	ex. <u>秦氏</u> (機織)・ <u>東漢氏</u> ・ <u>西文氏</u> (文筆)
<u>君</u>	… <u>地方の有力豪族</u> に与えられる	
<u>直</u>	… <u>地方の一般豪族</u> に与えられる	
<u>首</u>	…地方の小豪族に与えられる	
<u>史</u>	…文筆を担当する渡来人の子孫に与えられる	
<u>村主</u>	…渡来人の子孫に与えられる	

この中で覚えておかなきゃいけないのものは、「臣」・「連」・「君」・「直」の4つ。まず、「臣」という「姓」は蘇我氏や平群氏・葛城氏などの大和地方の有力豪族に与えられたもの。彼らは、基本的に大王から分かれた家柄の奴等で、それぞれ自分たちの拠点としている地域の名称をとって「〇〇氏」と名乗ったんだ。例えば、蘇我という地名を拠点としていたら蘇我氏、平群という地名を拠点としていたら平群氏ってことだね。それに対して、軍事を担当する大伴氏や物部氏、祭祀を担当する中臣氏などの特定の職務で仕えた有力豪族に対しては「連」、特定の職務で仕えた一般豪族の場合には「造」という姓を与える。また、地方の有力豪族には「君」という姓、地方の一般豪族の場合には「直」という姓が与えられたんだ。

ただ、「連」・「造」における「特定の職務」っていう意味がイマイチわかりづらいよね。少し、この特定の職務という内容に関しては説明していかないといけない(図解 NOTE に対応する解説)。

そもそも、ヤマト政権は全国に広がる地域を支配していただくから、それぞれ軍事や祭祀・財政などの職務を行っていかないといけない。でも、さすがに政治とか軍事とかをすべて大王が取り仕切っていくのは無理だよ。そのためには、それぞれ軍事の担当者や、祭祀(宗教)関係の担当者などを決めていかなければならない。

そこで、軍事や祭祀、その他にも文書の作成や、織物や武器の製作などをそれぞれ豪族に分担させるようにしたんだ。つまり、軍事関係を担当する豪族や、祭祀関係を担当する豪族など、それぞれ特定の役割を持たせるようにしたんだ。このような特定の職務で仕えた豪族を伴造豪族という。

それら特定の職務の中で、最も重要な軍事を担当していた有力豪族が大伴氏と物部氏、そして祭祀を担当していた有力豪族が中臣氏だったんだ。こうした伴造豪族の中でも、特に重要な軍事面や祭祀面などを担当する有力な豪族に、「連」という姓を与えたわけだ(なお、大伴氏の「伴」という字は伴造の「伴」のことを指している。つまり、大きな伴造ということから「大伴」というわけだ。また、物部氏の「物」は武器のことを指しているのだから、そのまま軍事を担当するということになる。また、中臣氏から後に登場するのが中臣鎌足だ)。

一方で、軍事や祭祀ほど重要ではないけど、それ以外のちょっとマニアックな仕事を職務としている豪族もいる。機織を担当している秦氏(弓月君の子孫)や、文筆(文書を作成すること)を担当している東漢氏(阿知使主の子孫)・西文氏(王仁の子孫)のようなね(391年の朝鮮出兵の後に日本にやってきた、あの渡来人たちだ!)。このような、それほど重要ではない職務を担当する一般的な豪族の場合に対しては、「造」という姓を与えたんだ。つまり、伴造の中でも重要な職務を担当している有力豪族には「連」の姓が与えられて、伴造の中でも一般的な豪族には「造」という姓が与えられたというわけだ(ただし、入試で「造」は問われない)。

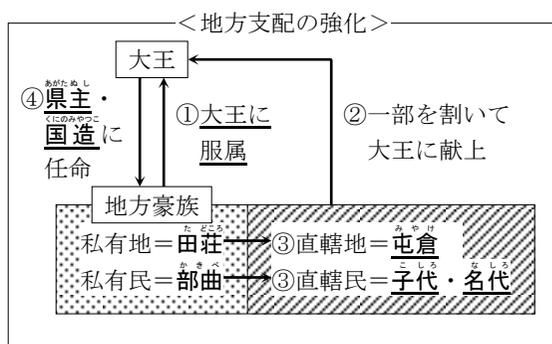
このように、「連」とか「造」という姓を与えられた豪族は、何かしらの職務を担当しているわけだけど、大王家から分かれたとされる「臣」は何をやっているのかって気になってくるよね。実は、この「臣」の場合は、大王家と家系がつながっている有力豪族ということで、特にそういった職務は担当していなかったんだ。つまり、家柄の良いニートってことだ。

だから、権威に甘えて何もしなくていいわけだから、初めのうちは楽でいい。でも、徐々にヤマト政権の支配が拡大していくと、それにつれて、軍事を担当する大伴・物部などの役割が重要になってきて、大王のもと国家的な事務・用務を担当していた「連」姓の豪族が伸びてきた。そのため、何もしないままで、ただその地位にあぐらをかいて威張っているだけだった、平群氏や葛城氏などの「臣」は勢力が弱くなって衰退してしまったんだ。

ところが、この「臣」の中で唯一先見の明があったのが蘇我氏。こういった「臣」が衰退していく中で蘇我氏は、「このまま中央豪族として威張っているだけでは、権力争いから取り残されてしまう」と気づいたんだ。そこで、「じゃあ、私たちはこれからは財政を担当しますから」と、自ら買って出て三蔵(斎蔵・内蔵・大蔵)の3つをまとめた総称というヤマト政権の財政を担当するようになったんだ。つまり、権威に甘えていただけの「臣」の中であって、蘇我氏は伴造的な豪族へと転身したわけだね。これによって、蘇我氏は「臣」の中で唯一生き残ることができ、その後もトップに居座ることが出来たんだ。

じゃあ、ヤマト政権の財政を担当するようになった蘇我氏は、どのようにしてヤマト政権の財政を強化していったのか。先ほどから述べているように、この時期には各地の豪族たちは大王に服属するようになっていった。そこで、彼らに対して服属した証として、豪族の私有地・私有民の一部を大王に献上するように命じたんだ。

右図のように、地方豪族が大王に服属すると(①)、豪族たちは私有地の田荘や、私有民の部曲の一部を割いて大王に献上しなければならない(②)。そうすると、その土地や人民は大王の直轄地の直轄地の屯倉や、直轄民の子代・名代となる(③)。でも、大王は畿内にいるから、それらの直轄地・直轄民を直接支配することは難しい。そこで、その地方豪族を県主・国造という地方役人に任命して(④)、その地域からの税金を大王に納めさせることにしたんだ。



そして、これら地方からの貢納品を納めさせたところが、蘇我氏が管理していた斎庭・内庭・大庭と呼ばれる三庭なんだ。このように、蘇我氏は各地に屯倉や子代・名代を設置して、ヤマト政権の財政を強化することで、その役割を増大させていったわけだ。

[E] ヤマト政権の職制—テキストP7対応—

大王から「姓」をもらった「氏」たちは、ヤマト政権の政治に参加するため、様々な役職に任命されていく。そういったヤマト政権の政治がどのように行われたのかを見ていこう。

まず、トップに大王がいるのはいいよね。そして、その大王の下で政治をリードしているのが「臣」の中から選ばれた大臣と、「連」の中から選ばれた大連の2人だ。だから、彼らが実際には政治の中心として、政治を動かしていくわけだね。でも、「臣」と「連」の中から一人選ばれるということは、選ばれなかった「臣」・「連」はどうするのだろうか？ こういったそれ以外の「臣」・「連」は大夫という役職に就くんだけど、これは聞かれないので消してくれていい。

一方で、「連」の姓をもらえなかった「造」などの特定の職務で仕える中小豪族を伴造と言うんだよね。でも、この伴造は氏上という地位にある豪族の首長の階層であり、実際にそういった特定の職務を自ら行うわけではない。豪族の首長である彼らが馬の鞍を作ったり、織物を織ったり、土器を作ったり、なんていう雑用を自ら行うわけじゃないよね。こういった特定の職務を実際に担当するのは、彼らの下で働いている伴とか品部と呼ばれる職業集団の連中なんだ(伴はその現場を監督する身分で、その下の現場で実際に物などを作る人たちをまとめて品部という)。

こういった品部の中には、服の錦などを織る錦織部や、刀や刀剣などの鉄製品を制作する韓鐵冶部、馬の鞍を制作する鞍作部、また、土師器という土器を制作する土師部、須恵器という土器を制作する陶部(陶作部)、さらに外交文書などを作成する史部など様々な職務があるんだ(史部という下っ端を支配している伴造にあたるのが東漢氏・西文氏になる)。この他にも様々な品部があるんだけど、覚えるのは6つまでで十分だ(土師器・須恵器の違いについては後述する)。

さて、ここまでは中央の政治体制のお話をしてきた。続いて、地方の仕組みを見ていこう。もともとヤマト政権の初めの頃は地方のことを「県」と書いて「あがた」と言っていたんだ。そこを支配していた豪族が県主ってやつらだ。ところが、それは3世紀~5世紀までのこと。6世紀になると、ヤマト政権の支配体制がかわって、大王が豪族を支配する氏姓制度が確立していったね。そのため、地方の名称も「県(あがた)」から「国(くに)」と呼ばれるようになり、この地方の県主も大王に服属することにより、国造と呼ばれるようになったんだ。そして、大王の直轄地である屯倉や直轄民の子代・名代を管理して、大宝律令が成立した後の郡司につながることになる。

だから、県主に関しては自らその地位を名乗るんだけど、国造に関してはヤマト政権に服属したことによりヤマト政権から任命される役職なんだ。また、この県主・国造の下に位置するのが稲置と呼

ばれる役職だ(ただし、稲置に関しては県主・国造の下に位置したという説と、県主・国造と同じ階層であった説と、2説に分かれているため正確にはわかっていない)。ちなみに、この「稲置」という役職はここで聞かれるわけではなく、天武天皇期の八色の姓のほうで聞いてくる内容なので、そっちの方で覚えておくとよい。

さて、ヤマト政権内では大王を頂点として、その支配下に豪族たちが組み込まれていったことで、豪族たちは自分の私有地・私有民の一部を割いて、大王に直轄地・直轄民として献上した。ゆえに、大王と豪族は、それぞれ私的に土地や人民を支配している。つまり、土地や人民に関しては、それぞれ大王は大王で自分の土地を持っていて、その土地に住んでいる人々を支配し、蘇我氏などの豪族は豪族で自分の土地を持っていて、その土地に住んでいる人々を支配しているわけだ。このように、大王は大王で自分の土地・人民を私的に支配し、豪族は豪族で自分の土地・人民を私的に支配している体制を私地私民制という。

こういった大王の支配している直轄地を屯倉といい、その屯倉を耕作する人を田部、そして、その地に住んでいる民のことを子代・名代という(子代・名代の順番は名代・子代で覚えてもよいが、後の改新の詔に関する『日本書紀』の記述で、「名代」ではなく「子代」と書かなければいけない個所があるので、子代・名代の順番で覚えておくとよい)。それに対して、豪族の私有地を田荘と言い、その土地で生活して田荘を耕作する私有民を部曲という。また、その地で奴隷的に働いている隷属民は奴婢(奴)という。そして、最後に子代・名代や、田部、部曲、品部などのように、何かしらの労働に就いている集団のことをまとめて部(部民)というんだ。

[F] 6世紀のヤマト政権(1)ーテキスト P6 対応ー

さて、ヤマト政権の6世紀に関する話に入っていこう。はじめに言っておくと、この6世紀はヤマト政権が相当動揺する時代だ。その6世紀になると動揺していく理由は二つある。一つ目が武烈天皇の死による大王家の断絶。そして、もう一つが朝鮮半島における新羅の勢力拡大だ。

まず、一つ目の大王家の断絶から。6世紀のはじめは**武烈天皇**という人が即位していたんだけど、その人が亡くなってしまったことにより、大王家の皇位継承者がいなくなってしまった。そのため、大連であった**大伴金村**が全国を駆けずり回って、三国(現在の福井県)で馬小屋の掃除をしていた少年を連れてきたんだ。それが507年に即位した、応神天皇5世といわれる**継体天皇**だ(いったん系統の切れた天皇家を継ぐということで継体天皇と名付けられた)。…でも、明らかにいったん家系切れていと思うんだけどね…。まあ、これによって、継体天皇を擁立したということで、大伴金村がヤマト政権の実権を握っていくんだ。

その継体天皇が福井県から迎えらるにあたって、それを記念して作られたとされるのが、**和歌山県**の**隅田八幡社人物画像鏡**だ。これは銅鏡の縁の部分にグル〜っと回る形で48文字が刻まれている。そして、その文中には**癸未年**に作成されたと記されてあったんだけど、その年代に関しては**443年**と**503年**の2つの説が存在するんだ。

何でこんな2つの年代説があるのかっていうと、これは**干支の法**というものが関係しているからなんだ。干支の法というのは、その名のとおり「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」の十干と、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の十二支の干支を用いた年号の言い表し方。これらをそれぞれ組み合わせることで、全部で60通りの干支が作られるんだ(ex.「壬申」・「庚午」・「戊辰」など様々ある)。そして、これは60通りあるから、年数も60年周期なんだ。つまり、この隅田八幡社人物画像鏡の「癸未年」というのは、時代から考えて5世紀あたりに作られたものだったので、443年と503年の2つが考えられるわけだ(443年説の場合には允恭天皇の時に製作されたことになる)。その史料が以下のものだね。

図 漢字の使用③「 隅田八幡社人物画像鏡銘 」(和歌山県)

癸未年八月日十、大王の年、男弟王、**意柴沙加宮**に在せし時、斯麻、長寿を念じ、開中費直穢人・今州利二人等を遣はし、白上同二百早を取り、此の鏡を作る。

(**癸未年(443年か503年)**8月日中、男弟王(即位前の**継体天皇**と考えられる)が**意柴沙加宮(忍坂宮)**にいらっしやった時に、斯麻百済の斯麻王(武寧王)と考えられる)が、長寿を祈って河内直穢人・今州利の2人を派遣し、上質の銅に200貫を用いて、この鏡を作った。)

このように国内では、大王家の断絶という危機的な状況を迎えていた最中、朝鮮半島でも状況が変動していった。それが、朝鮮半島での新羅の動きの活発化だ。今までの新羅はずっと高句麗の従属下にいたんだけど、ちょうど6世紀あたりから新羅が国家体制を整えて勢力を伸ばし始めてくる。そして、同じ朝鮮半島の百済に攻め込んだり、伽耶諸国(加羅)にも勢力を伸ばし始めていったんだ。

そのため、百済も新羅の勢力を抑えるのが難しくなってきたので、友好関係にある倭(日本)に援軍を送ってきてくれと求めてきたんだ。ところが、援軍を送りたくても、ヤマト政権はそんな状況じゃない。先ほど述べたように、当時は継体天皇が即位したばかりで、そんな援軍なんかを送れる余裕なんてない。そこで、「悪いけど、今は援軍は無理だ〜。でも、百済もやばいんだよね。じゃあ、わかった、しょうがない。伽耶諸国のうちの西側半分である任那4県をあげるから、それを利用して新羅と戦ってよ(任那とは『日本書紀』における伽耶諸国の総称)。」と、**大連**の**大伴金村**の独断で**512年**に任那4県を**百済**に割譲してしまったんだ。

つまり、百済に援軍を送れない状況だったので、伽耶諸国の一部をあげたわけだけど、これっておかしな話だと思わない？だって、伽耶諸国が日本の一部だったとしても、百済がピンチだからってその領土を無償であげちゃうなんておかしな話でしょ？

＜任那4県割譲の覚え方＞

「強(5)引(1)に(2)百済に割譲」

実はね、この任那割譲を行った大伴金村は賄賂をもらっていたんだ。そのため、後にこのことがバレちゃって、540年に大伴金村は失脚することになる。ちなみに、それを失脚させたのが物部尾輿という人物。そのため、これ以降は大伴氏に代わって物部氏が大連として実権を握っていくんだ。

さて、大伴金村の独断で任那4県を百済にあげちゃったわけだけど、さすがに百済も、もらいっぱなしは悪い気がしたんだろうね。そこで、百済も「どうも任那4県いただいてありがとさんね」ってことで、そのお返しをしてくれたんだよ。それが512年の任那4県割譲から右側に矢印が出ている513年の儒教の伝来だ。

そこで、この儒教を伝えるために百済から五経博士と呼ばれる儒教の先生たちが6世紀に来日してくるんだ。ちなみに、よくこの五経博士に関しては「五経博士という人」が日本にやってきたんだと勘違いしている人がいるんだけど、全然違うからね。そもそも五経とは「易経」・「詩経」・「書経」・「春秋」・「礼記」という儒教の中で尊重すべき教を合わせたもののことを言う。そして、それぞれ「易経」を教える先生の易博士とか、「詩経」を教える先生の詩博士などにいろいろ分かれているんだ。そして、その五経を教える先生を合わせて五経博士っていうわけ(こうした五経教える五経博士が513年から交替で来日してきた)。そして、後には「易(占い)」・「曆(こよみ)」・「医(医学)」を伝えるために、易博士や曆博士、医博士も来日してきたんだ。

任那4県を割譲してもらったことで、百済は何とか新羅に対抗していくことができる。でも、一方で残った東側部分の伽耶諸国はやばいよね。当然、残っている伽耶諸国も新羅に攻められちゃっているわけだからね(新羅の勢力拡大により、南加羅という部分も新羅に奪われてしまっている)。

だから、この伽耶諸国における勢力を回復しないとまずい。

そこで、新羅に軍隊送ることが決定したんだ。そこで、近江毛野を総大将にして新羅に軍隊を派遣することが決定したんだ。ところが、もし日本の軍隊が朝鮮半島にやってきちゃったら、新羅としても厄介この上ないよね。だから、日本には朝鮮半島に来てほしくないんだ。

そこで、日本の軍隊が朝鮮半島に渡ってこれないように、ヤマト政権内部の中で裏切り者が出るように裏工作を行っておいたんだ。そのヤマト政権内部で、新羅と手を結んでいた人物が九州の筑紫国造であった磐井という人物だ(筑紫国は現在の福岡県あたり)。この磐井という人物は九州で最も勢力を持っていた豪族なんだけど、その人物がヤマト政権の新羅出兵を食い止めるため、九州にやってきたところで反乱を起こしたんだ。この磐井が527年に起こした反乱を磐井の乱という(もともと「[A]ヤマト政権の成立」でも述べたように、ヤマト政権に従属させられた九州の豪族の地位は低かった。そのため、その地位に不満であった磐井が反乱を起こしたと考えられる)。

この磐井の乱のせいで、ヤマト政権は朝鮮半島に渡るのを阻まれて、やむなく軍隊を立て直して、その翌年によく物部麁鹿火という人物が鎮圧したんだ。なお、これによって磐井は処刑されることになるんだけど、その磐井の古墳と推定されているものが福岡県の岩戸山古墳だ。



回 筑紫国造磐井の乱『日本書紀』

(継体天皇即位)二十一年の夏六月の壬辰の朔甲午に、近江毛野臣、衆六万を率て、任那に住きて、新羅に破られし南加羅・喙己吞を為復し興建て、任那に合せむとす。是に、筑紫国造磐井、陰に叛逆くことを謀りて、猶預して年を経。……新羅、是を知りて、密に貨賂を磐井が所に行りて、勸むらく、毛野臣の軍を防遏へよと。是に、磐井、火・豊、二つの国に掩ひ抛りて、使修職らず。

(継体天皇即位 21年(527年))の6月3日に、近江毛野は兵6万を率いて、任那へ行き、新羅に破られた南加羅(洛東江口)と喙己吞(慶尚北道達城郡慶山か)を新羅から奪い返し、任那に編入しようとした。筑紫国造磐井は、ヤマト政権に反逆しようとしていたが、反乱を実行することをずっとためらっていた。…新羅は、このことを知って、ひそかに磐井に賄賂を送り、近江毛野の軍を防ぎ止めるように求めた。そこで、磐井は火(肥前・肥後の肥)・豊(豊前・豊後の豊)の2つの国に勢力を張って、ヤマト政権の政務を行わなくなった。)

この磐井が反乱を起こしたように、実はまだ地方豪族がヤマト政権に完全に従っていないということがわかるよね。そこで、その鎮圧後に、蘇我氏が中心となって各地に屯倉・子代・名代を設置していく作業が推進されるんだ。

ただし、磐井の乱のせいで、結局朝鮮半島への出兵は失敗してしまった(磐井の乱鎮圧後に新羅に対する出兵は行われるが、逆に任那四村を新羅に掠めとられるなど失敗している)。そのため、ヤマト政権は朝鮮半島における伽耶諸国の勢力を回復することはできず、結局その後の562年に新羅によって伽耶諸国は滅ぼされてしまったんだ。

[G] 6世紀のヤマト政権(2)ーテキスト P6 対応ー

このように、朝鮮半島では新羅がどんどん勢力を広げていって、なおかつ高句麗も相変わらず南下政策を続けていたため、百済としては毎回ピンチにさらされていた。そして、その当時の高句麗の南下政策のために、百済は国家存亡の危機を迎えるまでになってしまった。そこで、日本に軍事的・外交的な援助を要請しようと考えたんだ。でも、いきなり何も見返りなしで「援軍送って」は無理に決まっているよね。そこで、その援軍を要請するために、百済の聖明王が538年(552年)の可能性もある)に日本の欽明天皇に仏教を伝えてきたんだ。それが仏教公伝というものだ。でも、仏教公伝って言われても「公伝」の意味がイマイチよくわからないよね。授業でも何回か述べているけど、「公」という字がつくと国家が関連してくる。つまり、公伝とは「国家と国家の間で仏教を伝える」という公の正式な形での仏教伝来ということだ。

ところが、国家の間で「仏教教えてあげましょう」「はい、ありがとうございます」っていう正式に仏教を伝える前に、勝手に日本にやってきて勝手に仏教信仰していた渡来人がいたんだ。それが継体天皇時の522年に来日してきた司馬達等というオッサンだ。このオッサンは日本にやってきて、自分の家に勝手に仏像を置いてそれを私的に崇拝していたんだけど、そのことが平安時代に皇円という坊主が書いた仏教書『扶桑略記』に書かれてあったんだ。こういった民間の間で勝手に仏教を伝えちゃっていたことを、国家間での仏教公伝に対して仏教私伝という。ちなみに、その司馬達等という渡来人はその後日本に住み着いて、その子孫も日本で生活するようになった。その司馬達等の孫が鞍作島(止利仏師)とって、法隆寺金堂釈迦三尊像や飛鳥寺釈迦如来像などの有名な仏像を制作した人なんだ(文化史でも学習する)。



[法隆寺金堂釈迦三尊像]



[飛鳥寺釈迦如来像]

㊦ 仏教私伝『扶桑略記』 by 皇円

繼体天皇即位十六年壬寅，大唐の漢人案部村主司馬達止(等)，此の年春二月に入朝す。即ち草堂を大和高市郡坂田原に結び，本尊を安置し，帰依礼拝す。世を挙げて皆云ふ，「是れ大唐の神なり」と。

(繼体天皇即位 16 年の壬寅(522 年)，中国の鞍作鳥(止利仏師)の祖父である司馬達等が，この年の春 2 月に来日した。彼はすぐに大和高市郡坂田原(現在の奈良県高市郡明日香村の坂田付近)に草堂を建て，本尊を安置し，仏に帰依して礼拝した。世間の人々が皆言うことには，「これは中国の神様だ」と。)

さて，仏教私伝の話は置いておいて，仏教公伝の話に戻ろう。先ほど述べたように，仏教公伝とは国家と国家の間で正式に仏教を伝えること。だから，百済の聖明王が日本の欽明天皇に仏教を伝えたことが仏教公伝ってことになるんだけど，実はその仏教の伝来した時期に関しては，538 年をとる戊午説と 552 年をとる壬申説の 2 つの説に分かれているんだ

＜仏教公伝の覚え方＞

「ご(5)参(3)拜(8)は午(5)後(5)に(2)」

どうということかというところ，こういった古代の歴史的な事柄というのは昔の文献を調べることでわかるよね？んで，この仏教公伝に関して記した史料は 3 つあったんだけど，その中の『上宮聖徳法王帝説』(聖徳太子の伝記)と『元興寺縁起』の二つには「538 年に仏教が伝来した」と記されていたんだけど，『日本書紀』には「552 年に仏教が伝来した」と記されていたんだ。そのため，仏教伝来に関しては戊午年と壬申年説の二つに分かれちゃっているわけだ(おそらく『日本書紀』の記述が誤りと考えられ，538 年の戊午説の方が有力)。

㊦ 仏教公伝『上宮聖徳法王帝説』

志葵嶋天皇の御世に，戊午の年の十月十二日に，百済国の主(聖)明王，始めて仏の像經教并せて僧等を度し奉る。勅して蘇我稲目宿禰大臣に授けて興し隆えしむ。

(志葵嶋天皇(欽明天皇)の治世，戊午の年(538 年)の 10 月 12 日に，百済国の聖明王が初めて仏像・經文を伝え，僧侶をおくってきた。そこで天皇は命令を下し，大臣の蘇我稲目に仏像などを授け，仏法を盛んにさせたのである。)

なお，このような戊午説や壬申説など子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥といった干支を用いて年代を表す方法を干支の法と言うと先ほども述べたけど，こうした干支を組み合わせることで 60 通りの言い方があることは，ぜひ知っておこう。なぜかというところ，60 通りであるわけだから，60 年周期で同じ干支を用いた時期が来る。つまり，552 年が壬申の年であると，その 60 年後の 612 年も壬申の年になるし，その 60 年後の 672 年も壬申の年になるんだ。この 672 年って年号を見て何か感づいたかな？672 年には皇位継承争いの「壬申の乱」が起きた年にあたるんだよね(また，明治時代の 1872 年に作成された「壬申戸籍」や，同じく 1872 年に発行された「壬申地券」もそれぞれ壬申の年であり，672 年から 1200 年後にあたる)。

まあ，これによって仏教が日本に伝わったわけだけど，ここで問題発生。そもそも，今回の仏教伝来に関しては，日本が「仏教を教えてください。」って頼みこんだわけじゃないでしょ？言わば，百済が「仏教教えてあげるよ。気にしないでいいから受け取ってください。」って勝手に仏像とか経典を送ってきたわけだよね。だから，仏像とか経典を受け取った天皇もちょっと困っちゃったんだ。「…仏教教えてもらったのはいいんだけどさ。さ～て，どうした方がいいかな？」って，迷ってしまったので，欽明天皇は蘇我氏や物部氏などに尋ねたんだ。



そうしたら、渡来人と結びついていた蘇我氏の蘇我稲目は、渡来人との関係を重視していたので「ぜひ崇拝しましょう。そもそも朝鮮半島の国々も仏教を信仰しているわけですから、何で日本だけ背く必要があるんでしょうか。ガンガン崇拝しましょう」って言ったんだ。だから、蘇我氏は仏教崇拝に賛成な崇仏派になるわけだね。

ところが、これに反対したのが、その当時蘇我氏と勢力を争っていた物部氏の物部尾輿だ（「輿」という字は「興」ではないの気をつけるように）。その尾輿は「何言ってんだ、ばかやろう。日本には昔からなあ、天皇家の先祖にあたるいろいろな神々様が住んでいらっしやるんでい。例えば、天照大神とかいろんな神様がいらっしやるわけだ。そういった神々様がいらっしやるのに、違う国の仏なんてものを拝んだら、日本の神々様に怒られちまいますよ」と大反対したんだ。だから、物部氏は仏教崇拝に反対な排仏派になるわけだ。

輿

そこで、最終的に欽明天皇は蘇我稲目に「じゃあ、いったん試しに仏像を拝んでみろ」と決定を下したんだ。まあ、これによって一時的には仏教が信仰されるわけだけど、その後も蘇我氏と物部氏の間でその崇拝をめぐる争いが続いていくんだ。こういった蘇我氏と物部氏などによる、仏教の崇拝をめぐる論争を崇仏論争という。

この時の詳しい内容が記されている『日本書紀』の方の史料を見てみよう。『上宮聖徳法王帝説』も『日本書紀』も仏教公伝に関する史料が載っているんだけど、この崇仏論争につながる詳しいエピソードまで載っているのが『日本書紀』の方なので、それぞれ史料の出典にも気をつけておこうね。

回 仏教公伝『日本書紀』

（欽明天皇十三年）冬十月，百濟の聖明王……釈迦の金銅像一軀，幡蓋若干，經論若干巻を献る。……（天皇）乃ち群臣に歴問して曰く、「西蕃の献れる仏の相貌端嚴し。全ら未だ曾て有ず。礼ふべきや不や」と。蘇我大臣稲目宿禰奏して曰さく、「西蕃の諸国、一に皆礼ふ。豊秋日本、豈独り背かむや」と。物部大連尾輿・中臣連鎌子、同じく奏して曰さく、「我が国家の、天下に王とましますは、恒に天地社稷の百八十神を以て春夏秋冬、祭拝りたまふことを事とす。方に今改めて 蕃 神を拝みたまはば、恐るらくは国神の怒を致したまはむ」と。天皇曰く、「情願ふ人稲目宿禰に付けて、試に礼ひ拝ましむねし」と。

（欽明天皇 13 年（552 年）冬 10 月，百濟の聖明王が、…釈迦の金銅像一体と幡蓋（仏堂内の荘嚴具）と、いくらかの經論を献上した。…そこで天皇は群臣に一人一人問いかけられた。「百濟から献上された仏の顔は端正で美しい。いまだかつて見たことがないものであるが、礼拝すべきかどうか」と。大臣の蘇我稲目が申し上げた。「西隣りの国ではすべて礼拝しています。どうして日本だけがそむけましょうか」と。大連の物部尾輿と中臣鎌子が同じように申し上げた。「わが国で天下を支配されている天皇は、常に天地の多くの神々を春夏秋冬おまつりされることになっています。今、改めて外国の神を拝まれるならば、おそらくわが国の神の怒りをまねくことになりましょう」と。すると天皇（欽明天皇）は、「では、礼拝を希望している蘇我稲目に仏像をあずけ、試みに礼拝させてみることにしよう」と述べられた。）

でも、結局この稲目と尾輿の代では決着は着かなくて、その子供の代にまで引き継がれちゃったんだ。それが敏達天皇の時の蘇我馬子（稲目の子）と物部守屋（尾輿の子）による対立だ。そして、これがその次の厩戸王（聖徳太子）の父である用明天皇の代になっても続いていくんだ。

ところが、この用明天皇はかなりの病気がちだったため、587年に亡くなってしまった。そのため、天皇の後継者を決めないといけなかったんだけど、その後継者をめぐって泊瀬部皇子を支持する蘇我馬子と、穴穗部皇子を支持する物部守屋との間で争いが起きちゃったんだ。

この対立によって、蘇我氏と物部氏の間で争いが起きるんだけど、普通に考えたら、財政を専門とする蘇我氏よりも、軍事を専門とする物部氏の方が有利だ（蘇我氏が財政を専門とする豪族で、物部氏が軍事を専門とする豪族に関しては、[D] 氏姓制度で説明したハズ）。そこで、蘇我氏は、皇族や多くの豪族達を味方に引き入れて、圧倒的な数の差で勝負に臨んだんだ。

ところが、さすがは軍事を専門とする物部守屋。自ら木の上から弓矢を射掛けるなど、徹底的に抗戦したため、馬子も物部氏をなかなか倒せずにはいたんだ。そんな時に、馬子の味方をしている皇族のある人物が声をかけにきたんだ。それが厩戸王(聖徳太子)だ。そして、いきなり彼は「それなら私が戦に勝利できるように、戦の神である四天王に祈りましょう」と言って、小さな木彫りの四天王の像を彫り始めて、それに祈ったんだ。まあ、仏教マニアの彼にとっては、仏に祈れば戦も勝利できると考えたんだろうね。

その祈りが通じたのかどうかはわからないけど、その後何とか蘇我馬子は物部守屋を587年に滅ぼすのに成功したんだ。そして、その勝利することが出来たおかげとして、厩戸王(聖徳太子)が難波(現在の大阪市)に建てたのが四天王寺なんだ。また、同じように、蘇我馬子もその恩に報いましょうってことで奈良県の飛鳥地方に建てた最古の寺院が飛鳥寺(法興寺)なんだ(文化史でも学習する)。

＜守屋滅亡の覚え方＞

「イ(5)ヤ(8)な(7)守屋を倒せ」

この戦いに馬子が勝利したことによって、馬子の支持していた泊瀬部皇子が崇峻天皇として即位することになった(「峻」という字を「俊」にしないように気をつけてね)。ところが、この崇峻天皇って馬子に擁立させられたわけだから、当然実権は馬子が握っていて、崇峻天皇自体は何の実権ももっていなかったんだ。だから、おもしろくない。不満タラタラだ。

そんな崇峻天皇のもとに、ある日一匹のイノシシが貢物として届けられた。これを見た崇峻天皇は、

崇峻天皇「…ちよっ www! このイノシシめっちゃあのデブに似てるんですけど www」

そして、その発言が馬子の耳に入ってしまう。

家臣「馬子様。この前ですが崇峻天皇が馬子様のことを『馬子の奴、イノシシだけじゃなくてブタにも似てるわ。イバリコ馬子だわ。マジあのクソデブ死んじまえばいいのに。』って言っていました。」

蘇我馬子「何だと～! あのヤロウ! 崇峻天皇は俺にいつ何時逆らうらかもわからねえしな。それなら、いっそのこと殺しまえ」

ってことで、東漢直駒という人物に命令して、592年に崇峻天皇を暗殺してしまったんだ(なお、東漢直駒は阿知使主の子孫の東漢氏出身の人物で、直という「姓」を持った「駒」という人物)。また、この蘇我馬子は後の626年に亡くなるんだけど、その馬子の墓だと言われているのが、奈良県明日香村にある石舞台古墳というものだ。



[H] 古墳文化ーテキスト P6 対応ー

さて、ヤマト政権の推移と共に、渡来人の来日、儒教・仏教の伝来など古墳文化も一緒に説明してしまったので、残っている箇所は当時の信仰と習俗だけだ(P6の右にある古墳文化は通史と一緒に学習した方が時期も把握しやすいので、通史に絡めて説明した)。

では、当時の信仰から見ていこう。縄文時代の頃には、あらゆる自然現象には神様が宿っているというアニミズム(精霊崇拝)という風習があったよね。その影響から、日本では太陽、山、海などの自然には神が宿っていると考えて、それら自然の神様や、氏神と呼ばれる自分の祖先の神様を祀るために社という施設を造ったんだ。まあ、これは現在でいうところの神社のことなんだけどね。

＜祖先神を祀る社＞

伊勢神宮(三重県)＝天照大神を祀る……神明造という建築様式で造られている
出雲大社(島根県)＝大国主神を祀る……大社造という建築様式で造られている
住吉大社(大阪府)＝海神を祀る……住吉造という建築様式で造られている

上記のものは氏の祖先神を祀った社。例えば、天照大神は大王家(のちの天皇家)の祖先となった女神だけど、その天照大神を祀るために建てられたのが伊勢神宮。大国主神を祀っているのが出雲大社で、海神を祀っているのが住吉大社ということだね。一方で、山や島などの自然そのものを祀った社が以下のものだ。

＜社の覚え方①＞

「甘い世界に住む出雲の阿国」
 → 甘(天照大神)い世(伊勢神宮)
界(海神)に住む(住吉大社)
出雲(出雲大社)の阿国(大国主神)

＜自然神を祀る社＞

大神神社(奈良県)＝三輪山を神体とする
宗像神社(福岡県)＝沖ノ島を神体とする

＜社の覚え方②＞

「おみーは(オマエは)胸が大きいの」
 → おみ(大神神社)(みー)は(三輪山)
胸が(宗像神社)大きいの(沖ノ島)

この宗像神社に関しては、福岡県北部の玄界灘に浮かぶ沖ノ島を神体としていて、沖ノ島自体は「海の正倉院」とも呼ばれているんだ。

このように様々な神々に社に祀るわけだけど、神を祭る時には清潔でなければならない。そのため、体についた罪や穢れを取り除くために行われたものが禊・祓の2つだ。それぞれの違いは、前者の禊は穢れなどを「水」で清めるもの、後者の祓は穢れなどを「お祓い」をして払いのけるものだ。つまり、後者の祓は、よく神社で神主さんとかにしてもらおう「お祓い」のことだね。

その一方で、呪術的な事もこの時代にはまだ行われている。例えば、吉凶を占いたい場合には、太占の法(ふとまに)といって、鹿の肩甲骨を焼いて、その割れ具合で今後の吉凶を占うものがある。縦にひびが入れば縁起がよくて、横にひびが入ったら縁起が悪いといった感じだね。また、ある人物が嘘をついていて、それが正しいのか嘘なのかを確かめる裁判方法として盟神探湯(くかたち)というものもある。これは熱湯の中に石を入れておき、容疑者に熱湯に手を入れさせて石を取らせるんだ。そして、火傷が無かったら無罪、火傷していたら有罪となるわけだ。何とも無茶苦茶な感じだね。

また、古墳時代にも水稲耕作が行われているため、先ほどと似たように、「今年もたくさんお米が実りますように」と神に豊作を祈ったり、「今年もたくさんお米がとれました。どうもありがとうございます」と神に感謝したりすることもある。そのために行われる農耕儀礼が、毎年春に豊作を神にお願いする祈年祭と、毎年秋に収穫を感謝する新嘗祭だ(なお、新嘗祭の中で、天皇が即位した年に行われるものを特に大嘗祭という)。

[I] 古墳の変遷—テキスト P5 対応—

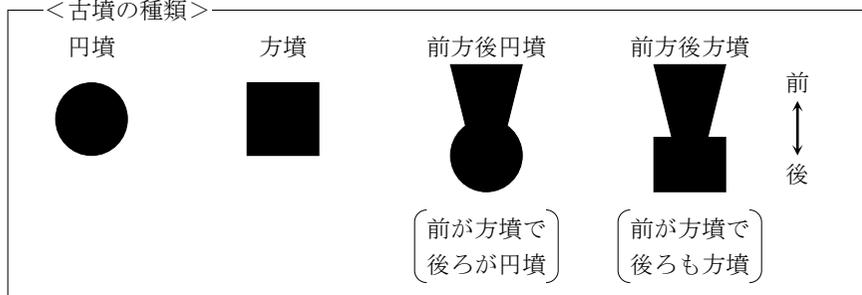
さて、古墳時代でおそらく君たちが一番苦手とする古墳の変遷のお話しに入っていこう。おそらく学校などで学習した際には「古墳の大きさが変わったりとか形が変わったりとか混乱しやすいところで、流れも何もないようなところ」という風に解釈している可能性が強いと思う。

でも、はっきり言おう。この古墳の変遷には明確な流れが存在する。ただ、ここを理解するためには、テキスト P7(図解 NOTE)で学習した「ヤマト政権の推移」の箇所が重要になってくる。僕はテキスト P7(図解 NOTE)でヤマト政権の支配体制の移り変わりを4世紀・5世紀・6世紀の時期に分けて説明したけど、そのヤマト政権の支配体制という背景を考えると、この古墳の変遷ってのは理解しやすくなるんだ。だから、このページの古墳の変遷も、4世紀(前期)・5世紀(中期)・6世紀(後期)とヤマト政権の推移と同じ時期に分けられているでしょ？つまり、このページはP7(図解 NOTE)のヤマト政権の推移と関連していると考えてくれると、理解も非常にスムーズになってくる。

まず、古墳時代に関しては、前期(3世紀後半～4世紀)・中期(4世紀末～5世紀)・後期(6世紀～7世紀)という3つの区分に分けることができる。

その4世紀の頃のヤマト政権は、まだ全国的なものではなくて大王を中心に畿内・瀬戸内の豪族が連合した政権に過ぎず、その勢力も弱かった。そして、自分たちの結びつきを示すために前方後円墳などの画一的な古墳を築造していった。だから、古墳が造られた地域も畿内が中心で、その規模も小規模な前方後円墳だったんだ(前方後円墳以外にも円墳や方墳、前方後方墳などといった種類のものもあるけど、入試で聞かれるのは一番重要な前方後円墳。このうち、最も数が多いのは円墳、次いで方墳だが、すべての時代を通じて大規模なものは前方後円墳になる)。

＜古墳の種類＞



なお、こうした4世紀の古墳として最も巨大な古墳が奈良県の箸墓古墳で、この古墳には倭迹迹日百襲姫命という人物が被葬者として埋められている。时期的なものに合わせて卑弥呼の墓なんじゃないかとも言われている。この他にも、京都府の樺井大塚山古墳や、岡山県の浦間茶臼山古墳とかがあるけど、これらは問われないので消してくれていい。

箸

このように、4世紀の頃のヤマト政権の勢力が弱かったため、古墳の規模も小さかったわけだ。それが5世紀になると、ヤマト政権の連合が関東・九州といった全国的に広がっていき、その勢力も強大化していった。そのため、これに伴って古墳も全国的に造られるようになっていき、その規模も巨大化していったんだ。

こうした5世紀の古墳として代表的なものが、仁徳天皇陵といわれる大阪府の大仙陵(大山)古墳(全国1位の大きさで百舌鳥古墳群の一つ)、応神天皇陵といわれる大阪府の豊田御廟山古墳(全国2位の大きさで冨田古墳群の一つ)、履中天皇陵といわれる大阪府の陵山古墳(全国3位の大きさで佐紀盾列古墳群の一つ)、そして中国地方最大の古墳である岡山県の造山古墳(全国4位の大きさ)だ。

—<5 世紀の代表的な古墳>—

大仙陵(大山)古墳(大阪府)……仁徳天皇陵で全国1位(百舌鳥古墳群の一つ)
 誉田御廟山古墳(大阪府)……心神天皇陵で全国2位(古市古墳群の一つ)
 陵山古墳(大阪府)……履中天皇陵で全国3位(佐紀盾列古墳群の一つ)
 造山古墳(岡山県)……中国地方最大の古墳で全国4位

これら大仙陵古墳や誉田御廟山古墳、陵山古墳の周りには、いくつもの古墳が集中していて、こういった古墳の集まりを古墳群というんだ。例えば、右写真のように、百舌鳥古墳群の中に大仙陵古墳があるようにね。また、3位の陵山古墳はまったく聞かれないので、余裕のある子はむしろ4位の造山古墳の方に注意しておこう。なぜ4位の方が問われるかという、これは中国地方における最大の古墳だよ。ヤマト政権の推移でも説明をしたけれども、ヤマト政権においては畿内の豪族に次いで、瀬戸内地方の豪族が勢力を誇っていた。その瀬戸内地方の中でも特に勢力をもっていた吉備地方の力を示すものとして、代表されるのがこの造山古墳なんだ。だから、こっちの方が入試では問われやすいわけだ。



[百舌鳥古墳群]

さて、6世紀になると、ヤマト政権では氏姓制度が成立して、各地の豪族たちが大王に服属していたよね。そのため、今まで古墳を造っていた豪族たちも、大王の古墳より大きい古墳は造らないように自重していくようになる。だから、地域は全国的に造営されるんだけど、その規模は縮小していくわけだ。また、この6世紀になると、今まで古墳を造っていた豪族層に加えて有力農民が古墳を造営するようになる。これは古墳の変遷で注意しなければいけないところなんだけど、少しその背景についてお話ししよう。

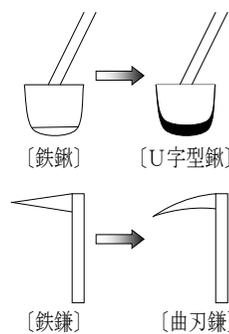
そもそも古墳時代は弥生時代の次にくる時代だよ。だから、当然古墳時代になっても弥生時代に行われていた農業は引き続き重要なウェイトを占めてくる。そのため、この古墳時代になると、弥生時代よりも更に農耕が発達し、新たな農具などが登場していったんだ。その新たな農具の代表的なものがU字型鍬先・鋤先や曲刃鎌などの鉄製農具だ。

そもそも弥生時代の後期には、鉄鍬・鉄鋤、それから鉄鎌などの鉄製農具が登場してきたのは覚えているかな？これら鉄製農具を更に効率よく改良したのが、鉄鍬・鉄鋤を改良したU字型鍬先・鋤先と、鉄鎌を改良した曲刃鎌なんだ。

まず、前者の鉄鍬とか鉄鋤の場合は先っぽが鉄製のものだったんだけど、これを鍬と鋤の先をU字型にすることで、より深く耕せるようにしたのがU字型鍬先・鋤先なんだ。そして、後者の鉄鎌の部分を曲がった形にしたものが曲刃鎌だ(今までの鉄鎌のように刃の部分が真っ直ぐな状態で根刈りを行うよりも、曲刃鎌のように刃の部分が曲がっていると稲を刈りやすくなる)。こうした鉄製農具が普及したことや、湿田に比べて生産性の高い乾田が普及したことにより、古墳時代には農業生産力が発達することになったんだ。

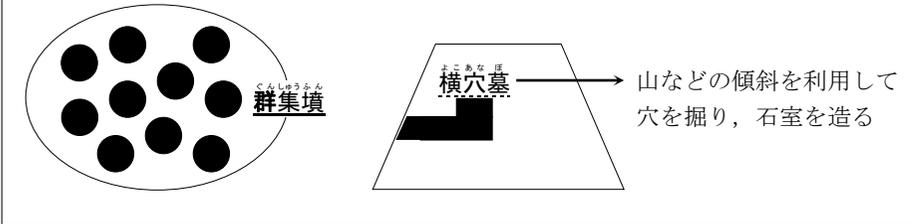
このように古墳時代後期になると、鉄製農具や乾田が普及したことにより、農業生産力が向上し、有力農民が台頭した。そして、彼ら有力農民もヤマト政権の支配下に組み込まれると、小規模な円墳を造営していくようになったんだ。こうした小規模な円墳がいくつも集まったものを群集墳という。まあ、言わば小さい丸めのウンコみたいな円墳がいっぱい集まったものだと思うとすればいい(笑)。

—<鉄製農具>—



なお、この群集墳の場合はいくつもの小さな円墳がたくさん集まっていることから「百塚」とか「千塚」と呼ばれることが多い(塚とは墓の意味なので)。その群集墳の代表的な古墳が、和歌山県の岩橋千塚古墳や、奈良県の新沢千塚古墳、埼玉県の吉見百穴古墳だ。なお、吉見百穴古墳は群集墳であるんだけど、山腹や大地の縁辺に穴を掘って構築した横穴墓の群集墳なんだ。横穴墓とは、丘陵の斜面や崖面を水平方に掘って、羨道(通り道)と玄室(遺体を安置する部屋)をつくるもの。まあ、横穴墓なんて全く聞かれないけどね。

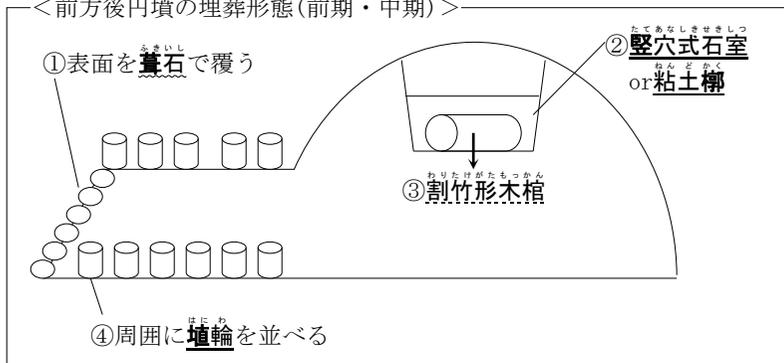
< 群集墳と横穴墓 >



こうした群集墳以外では、奈良県藤ノ木古墳や、奈良県高松塚古墳・福岡県竹原古墳のような装飾古墳が問われる。藤ノ木古墳は、奈良県斑鳩町の法隆寺にある円墳なので、あの厩戸王(聖徳太子)とも関連があるんじゃないかと言われている古墳。また、石室の壁とかに絵画・彫刻などをあしらって装飾しちゃった古墳をまとめて装飾古墳というんだ(そのままじゃねえか)。

それでは、その古墳の内部とその周りの造りなどを解説していこう。まず、埋葬形態に関しては前期から後期にかけてその形態が変化していくんだけど、まずは前期・中期の頃に多かった前方後円墳から見ていこう。前方後円墳は上から見ると鍵状の形になるんだけど、断面図、つまり横から見ると以下のような感じになるよね。

< 前方後円墳の埋葬形態(前期・中期) >



まず、この古墳の斜面とかには、①のように雨で崩れないように墓石という石が葺かれている。そして、古墳っていうのは、その豪族の首長のために造られた埋葬施設なわけだから、その首長の遺体を安置するための部屋が必要になる。それが②のように、頂上から縦に掘られた部屋で、その部屋が石で造られていることから竖穴式石室というんだ(この他にも石室をつくらなくて、棺の周りを粘土で覆っていき、そのまま塗り固めてしまう粘土槨というものもある)。そして、その石室の中には、③のように遺体を入れるための木で造られた棺があるんだけど、それを割竹形木棺という(割竹形木棺とは、丸太を縦に半分に切って、中をくり抜いた棺のこと。竹を半分に切った形に似ていることから呼ばれる)。

最後に「この古墳は偉い人が納められてる聖域なんだぞ」ということを示すために、④のように、古墳の頂上とか周りに埴輪を配置していった。まあ、正確に埴輪が並べられた理由はわかってはいないんだけどね(『日本書紀』には埴輪は殉葬の代用として用いられたと記されているが、それは実態に合っていない。埴輪は墳丘を取り巻き埋め込まれており、古墳を聖域と画する意味をもち、墳土の土留めの役割を果たしたと考えられる)。ただし、この埴輪に関しては、前期は土管状の円筒埴輪が用いられていたんだけど、中期以降になると、形象埴輪と言って、家とか人・動物をかたどったものに代わっていった(家形埴輪・器財埴輪・人物埴輪・動物埴輪などと呼ばれるものがある)。

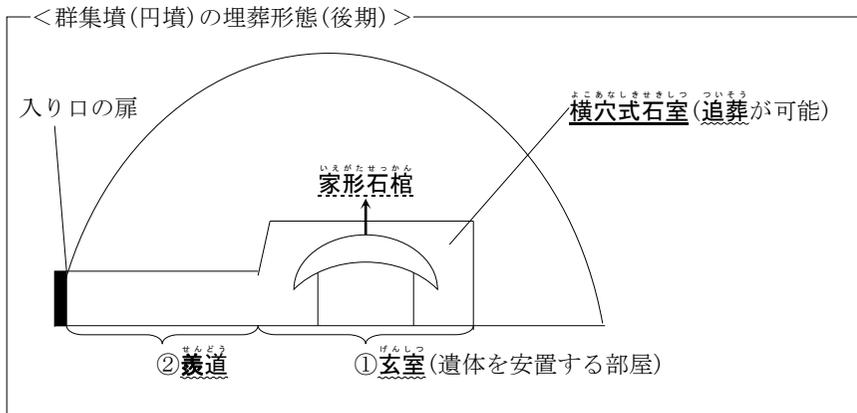


[円筒埴輪]

[形象埴輪]

ところが、この堅穴式石室を造る場合には、非常に人々の労力もかかるし、時間もめっちゃめっちゃかかる。そして、何よりも効率が悪いんだ。なぜかという、たとえばある人物が亡くなって、その人のために堅穴式石室の古墳を造ったとしよう。そうすると、その人を石室に埋葬すると、その上から土などで覆ってしまうため、再び開けることができなくなってしまうんだ。だから、別の人を埋葬したい時は、また死ぬたびに別の古墳を造らなきゃいけないわけだ。

このように、堅穴式石室にひとたび人を埋葬してしまうと、別の人物を後から埋葬する追葬ができなくなってしまう。そこで、同じ古墳に他の人物も追葬できるように、古墳時代の後期になると、この古墳の内部が横穴式石室と呼ばれるものに変化していった。特に、この古墳時代の後期には、群集墳のように円墳の方が多くなっていく。そこで、図解に関しても円墳を用いて図解していこう。



まず、古墳の内部には、①のように玄室と呼ばれる遺体を安置するための部屋を造っておく。そして、後からでも追葬できるように、②のように羨道と呼ばれる道を作っておいて、羨門という入り口を作っておくんだ(羨道の「羨」という字の下は「にすい」ではなく「さんずい」なので気をつけるように)。これによって、この入り口の羨門を開ければ、追加して何人も埋葬できるようになるよね。だから、何人も埋葬できるように、この玄室のスペースも結構広くて、その玄室に置かれている棺も大きいんだ。この棺として用いられたものが、③のように上が屋根みたいな形になっている家形石棺という石でつくられた棺だ。

羨

こういった後から何人でも埋葬ができる追葬が可能になった石室のことを横穴式石室という。これなら何人も埋葬することができるわけだから、非常に都合がいいよね。そのため、基本的にランクの低い豪族とか有力農民にとってみれば、「そこまでの権力はないけれども古墳は造りたい」という自分たちの目標を叶えることのできる都合のいい埋葬形態だったわけだ。

それでは最後に。こういった石室の中にある棺には豪族たちの遺体などが納められているんだけど、それ以外にも豪族が生前使用していた副葬品などが納められている。前期の頃には、玉・銅鏡などの呪術的なものが多いことから、この前期の頃の豪族は司祭者的な性格が強いことがわかる。おそらく卑弥呼みたいに、呪術的な力で支配していた者が多かったんだろうね。なお、この銅鏡の中でも多く発見されるものが三角縁神獸鏡で、卑弥呼が魏から賜った銅鏡 100 枚ではないか、とも言われていたよね。でも、実は三角縁神獸鏡って日本国内では 400 枚ほど見つかったりするんだよね。だから、同范鏡という同じ鋳型で作った鏡や、舶載鏡という中国などで作った鏡、仿製鏡という舶載鏡を模倣して作った鏡などが入り混じっているから、400 枚も見つかったのだからと言われてる。

それに対し、中期になると武器・馬具のような軍事的なものが多いことから、中期の頃の豪族は武人的な性格が強いことがわかる(391 年の朝鮮出兵で、騎馬民族の高句麗に敗れた影響から、倭国でも乗馬の風習が始まり、馬具が服装されるようになった)。おそらく、この頃にはヤマト政権の支配が拡大していたから、力という実力をもつ者が支配していたんだろうね。

そして、後期になると、土師器・須恵器のような日常的なものが多いことから、新たに台頭した有力農民などがその日常的な物を埋葬していったことがわかるんだ。

<土師器・須恵器>

ところで、急に土師器や須恵器と、かる〜く言ってみただけど、これらの違いは正誤問題でも定番になる。まず、そもそも土師器をつくるのが土師部で、須恵器をつくるのが陶作部なわけだけど、これらの土器に関してはその違いも知っておかなければならないんだ。

まず、前者の土師器というのは、土師部と呼ばれる品部が制作した弥生土器の系統をひいた土器。この土師器を制作する場合には、基本的に野焼きと言って、焚き火みたいに地面に穴を掘って焼くんだ。でも、そうすると酸素が入りやすくなり、熱が逃げていってしまうため、焼く時の温度は 800 度ぐらいが限界になってしまう。そのため、色自体も弥生土器と同じ色の赤色になるんだ。

一方、後者の須恵器というのは、陶作部(陶部)と呼ばれる品部が制作した朝鮮半島の技術で作られた土器。この須恵器の場合は、ろくろを使って形を整えて、のぼり窯と呼ばれる窯で焼くんだ(ろくろとは、陶芸をする際にクルクル回転させるやつ)。そうすると、窯で焼くので、酸素はあまり入らなくなり、熱が逃げなくなる。それにより、1000 度くらいの高温で焼けるようになり、酸素が入らないことから色も灰色になるんだ。なお、入試には出ないけど裏の知識をお話しよう。実は後者の須恵器に関してはもともと「陶器」と書いて「すえき」と読んでいたんだ。そのため、「陶器」を作る品部のことを「陶作部」というわけだ。ところが、後世になると陶磁器における「陶器(とうき)」も登場してくる。そのため、「陶器」だと「すえき」とも「とうき」とも読めてしまう問題点が出たため、漢字を「須恵器」に改めたんだ。でも入試では朝鮮半島の技術でつくられた土器と問われたら「須恵器」と答えるようにしてね。



[土師器]

[須恵器]

最後に。古墳が造られていった時代を古墳時代というわけだけど、大化の改新(645)後の646年に大化の薄葬令が出されて以降は、古墳の造営は減少していくことになる(蘇我馬子の墓といわれる石舞台古墳や、高松塚古墳・キトラ古墳など、7世紀末~8世紀にかけて造営された終末期古墳と呼ばれる一部の古墳は造営されている)。その理由は、薄葬令によって巨大な古墳を築造することが禁じられたこと、また、仏教の伝来によって火葬が一般化したこと、さらに仏教の伝来によって寺院を建立することが豪族の権威の象徴となっていくことが挙げられる(最初に火葬された僧として道昭という人物がいるが、余裕があったら覚えてみていい)。